

各関係機関長 殿
病害虫防除員 殿

徳島県立農林水産総合技術支援センター
病害虫防除所長
(公印省略)

平成21年度農作物病害虫発生予察情報について

平成21年度農作物病害虫発生予報第11号を発表したので送付します。

平成21年度農作物病害虫発生予報第11号

平成21年12月22日
徳島県

野菜

冬春トマト

疫病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 12月中旬の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が 3.3%, 発病度が0.02)。
- (2) 12月18日発表の1ヶ月予報では、気温、降水量、日照時間ともに平年並と見込まれている。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 気温が20 程度の低温で多湿の時に発生しやすいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。
- (2) 窒素肥料を過用すると茎葉が軟弱となり発生しやすくなるので、肥培管理に注意する。
- (3) 罹病葉は伝染源になるので、できるだけ早く摘み取って、ハウス外で処分する。
- (4) 病原菌は気孔から侵入するので、薬剤散布は気孔の多い葉の裏側を重点的に行なう。特に、下葉には丁寧に散布する。
- (5) 病原菌が侵入してからごく短期間で発病するので、発生を認めたら散布間隔を短縮して、集中的に薬剤散布を行なう。

灰色かび病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 12月中旬の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が 5.0%, 発病度が 0.2)。
- (2) 12月18日発表の1ヶ月予報では、気温、降水量、日照時間ともに平年並と見込まれている。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 気温が20 位で多湿の時に発生しやすいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が

続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。

- (2)発病果や花弁などは伝染源になるので、できるだけ早く除去し、ハウス外で処分する。
- (3)耐性菌出現の恐れがあるので同一系統の薬剤の連用は避ける。

葉かび病

1)予報内容

発生量 平年並～やや少なく(前年並),発生程度は「少」

2)予報の根拠

- (1)12月中旬の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が19.1%,発病度が4.7)。
- (2)12月18日発表の1ヶ月予報では、気温,降水量,日照時間ともに平年並と見込まれている。

3)防除上注意すべき事項

- (1)施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。
- (2)罹病葉は伝染源になるので、できるだけ早く摘み取って、ハウス外で処分する。
- (3)窒素肥料の過用は避ける。
- (4)薬剤は発病前から予防的に用いるとともに、葉裏に十分かかるよう散布する。
- (5)耐性菌出現の恐れがあるので同一系統の薬剤の連用は避ける。

オンシツコナジラミ

1)予報内容

発生量 平年並(前年並)で,発生程度は「少」

2)予報の根拠

- (1)12月中旬の巡回調査では、発生圃場率が40.0%,寄生葉率が3.8%であり、平年(33.4%,4.9%)並の発生である。

3)防除上注意すべき事項

- (1)多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。また幼虫は葉裏に多く寄生しているので、薬液が葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。
- (2)薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

タバココナジラミ(バイオタイプB,バイオタイプQ)

1)予報内容

発生量 平年並(前年並)で,発生程度は「少」

2)予報の根拠

- (1)12月中旬の巡回調査では、発生圃場率が20.0%,寄生葉率が0.6%であり、ほぼ平年(6.0%,0.7%)並の発生である。

3)防除上注意すべき事項

- (1)コナジラミ類が発生している苗は使用しない。
- (2)圃場周辺の雑草は増殖源となるので、除草を徹底する。
- (3)施設開口部(出入り口,天窓,ハウスサイド)に0.4mm以下の防虫ネットを被覆し、昇温抑制のため循環扇を設置するとともに、紫外線カットフィルム(侵入防止),黄色粘着紙(誘殺),光反射マルチ(忌避)などの物理的防除法を活用する。
- (4)多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。薬液は葉裏にも充分に付着するように丁寧に散布する。
- (5)ネオニコチノイド系剤の一部,及び合成ピレスロイド系剤に対する感受性が低いことが報告されているバイオタイプQに対しては、ジノテフラン,ニテンピラム,ピリダベン,スピロメシフェン(ミニトマトには適用無し。),デンブン,オレイン酸ナトリウム等の剤が有効であるとされている。
- (6)薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

- (7)栽培終了後は成虫の施設外への分散を防ぐため、薬剤防除を行ったうえで株を切断し、施設を密閉して蒸し込み、虫を死滅させる。

冬春ナス

うどんこ病

1)予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2)予報の根拠

- (1)12月中旬の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が8.0%、発病葉率が0.3%)。
- (2)12月18日発表の1ヶ月予報では、気温、降水量、日照時間ともに平年並と見込まれている。

3)防除上注意すべき事項

- (1)発生が多くなってからでは防除が困難になるので、初期防除に努める。
- (2)罹病葉は早期に圃場外に持ち出し、病原菌密度の低下に努める。
- (3)耐性菌出現の恐れがあるので、同一系統薬剤の連用は避ける。

すすかび病

1)予報内容

発生量 平年並～やや少なく(前年並)、発生程度は「少」

2)予報の根拠

- (1)12月中旬の巡回調査では、発生圃場率が16.7%、発病葉率が0.2%であり、平年(32.7%、6.6%)と比べてやや少なめの発生である。
- (2)12月18日発表の1ヶ月予報では、気温、降水量、日照時間ともに平年並と見込まれている。

3)防除上注意すべき事項

- (1)気温が25度位で多湿の時に発生しやすいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。また、灌水過多にならないように注意する。
- (2)多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。

灰色かび病

1)予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2)予報の根拠

- (1)12月中旬の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が1.9%、発病果率が0.02%)。
- (2)12月18日発表の1ヶ月予報では、気温、降水量、日照時間ともに平年並と見込まれている。

3)防除上注意すべき事項

- (1)気温が20度くらいの低温で多湿の時に発生しやすい。特に湿度の影響が大きいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。また、灌水過多にならないように注意する。
- (2)朝夕の急激な冷え込みは発生を著しく助長するので、適切な温度管理に努める。
- (3)発病果や花弁などは伝染源になるので、できるだけ早く除去し、ハウス外で処分する。
- (4)多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。
- (5)耐性菌出現の恐れがあるので同一系統の薬剤の連用は避ける。

アブラムシ類

1)予報内容

発生量 平年並(前年並)で,発生程度は「少」

2)予報の根拠

(1)12月中旬の巡回調査では,発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が 1.0%,寄生葉率が 0.1%)。

3)防除上注意すべき事項

(1)多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。アブラムシ類は葉裏や芯芽に寄生しているので,薬液は葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。

オンシツコナジラミ

1)予報内容

発生量 平年並~やや多く(前年よりやや多い),発生程度は「少」

2)予報の根拠

(1)12月中旬の巡回調査では,発生圃場率が66.7%,寄生葉率が 6.3%であり,平年(34.3%, 2.7%)と比べてやや多めの発生である。

3)防除上注意すべき事項

(1)多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。

ハダニ類

1)予報内容

発生量 平年並(前年並)で,発生程度は「少」

2)予報の根拠

(1)12月中旬の巡回調査では,発生圃場率が16.7%,寄生葉率が 0.2%であり,ほぼ平年(4.7%, 0.2%)並の発生である。

3)防除上注意すべき事項

(1)多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。ハダニ類はほとんど葉裏に寄生しているので,薬液は葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。

ミナミキイロアザミウマ

1)予報内容

発生量 平年よりやや少なく(前年並),発生程度は「少」

2)予報の根拠

(1)12月中旬の巡回調査では,発生圃場率が16.7%,寄生葉率が 0.5%であり,平年(28.3%, 4.9%)と比べてやや少なめの発生である。

3)防除上注意すべき事項

(1)多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。

(2)花器,新葉,葉裏,葉の重なった部分などに集まる習性があるので,それらの部分に薬液が十分かかるよう,丁寧に散布する。

冬春キュウリ

うどんこ病

1)予報内容

発生量 平年よりやや多く(前年より多い),発生程度は「少」

2)予報の根拠

(1)12月中旬の巡回調査では,発生圃場率が 100%,発病葉率が14.0%であり,平年(45.5%, 10.3%)と比べてやや多めの発生である。

(2)12月18日発表の1ヶ月予報では,気温,降水量,日照時間ともに平年並と見込まれている。

3)防除上注意すべき事項

- (1)発生が多くなってからでは防除が困難になるので、初期防除に努める。
- (2)罹病葉は圃場外に持ち出し、病原菌密度の低下に努める。
- (3)同一系統薬剤の連用は耐性菌出現の恐れがあるので避ける。

灰色かび病

1)予報内容

発生量 平年並～やや多く(前年並～やや多い)、発生程度は「少」

2)予報の根拠

- (1)12月中旬の巡回調査では、発生圃場率が16.7%、発病果率が3.7%であり、平年(1.1%,0.01%)と比べてやや多めの発生である。
- (2)12月18日発表の1ヶ月予報では、気温、降水量、日照時間ともに平年並と見込まれている。

3)防除上注意すべき事項

- (1)気温が20 程度の低温で多湿の時に発生しやすい。特に湿度の影響が大きいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。また、灌水過多にならないように注意する。
- (2)朝夕の急激な冷え込みは発生を著しく助長するので、適切な温度管理に努める。
- (3)発病果や花弁などは伝染源になるので、できるだけ早く除去し、ハウス外で処分する。
- (4)多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。
- (5)耐性菌出現の恐れがあるので同一系統の薬剤の連用は避ける。

べと病

1)予報内容

発生量 平年並～やや多く(前年よりやや多い)、発生程度は「少」

2)予報の根拠

- (1)12月中旬の巡回調査では発生圃場率が50.0%、発病葉率が4.3%であり、平年(27.2%,2.8%)と比べてやや多めの発生である。
- (2)12月18日発表の1ヶ月予報では、気温、降水量、日照時間ともに平年並と見込まれている。

3)防除上注意すべき事項

- (1)施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。また、灌水過多にならないように注意する。
- (2)肥料切れや着果過多などで樹勢が衰えた場合に激発するので、肥培管理に注意する。
- (3)多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。薬剤散布は、葉の裏側を重点的に行なう。
- (4)耐性菌出現の恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

アブラムシ類

1)予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「無～少」

2)予報の根拠

- (1)12月中旬の巡回調査では発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が5.3%、寄生葉率が0.3%)。

3)防除上注意すべき事項

- (1)多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。

オンシツコナジラミ

1)予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2)予報の根拠

- (1)12月中旬の巡回調査では、発生圃場率が16.7%、寄生葉率が0.2%であり、ほぼ平年(3.6%,0.3%)並の

発生である。

3)防除上注意すべき事項

(1)多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。

ミナミキイロアザミウマ

1)予報内容

発生量 平年並(前年並)で,発生程度は「少」

2)予報の根拠

(1)12月中旬の巡回調査では,発生圃場率が33.3%,寄生葉率が1.0%であり,ほぼ平年(1.0%,0.01%)並の発生である。

3)防除上注意すべき事項

(1)多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。

アブラナ科野菜共通

黒腐病

1)予報内容

発生量 平年よりやや少なく(前年よりやや少ない),発生程度は「少」

2)予報の根拠

(1)12月中旬のキャベツ,ブロッコリー,カリフラワーの巡回調査では,発生圃場率が8.3%,発病度が0.3であり,平年(44.7%,4.1)と比べてやや少なめの発生である。

(2)12月18日発表の1ヶ月予報では,気温,降水量,日照時間ともに平年並と見込まれている。

3)防除上注意すべき事項

(1)発生初期または降雨前後の防除に努める。

(2)害虫による食害痕は病原菌の進入経路となり発病を誘発するので,害虫駆除も適切に行なう。

(3)被害株をそのまま放置しておく,次期作の際に伝染源となるので,圃場外に持ち出し適切に処分する。

アブラムシ類

1)予報内容

発生量 平年より多く(前年よりやや多い),発生程度は「少~中」

2)予報の根拠

(1)12月中旬のキャベツ,ブロッコリー,カリフラワーの巡回調査では,発生圃場率が83.3%,寄生株率が24.7%であり,平年(35.1%,7.5%)と比べて発生が多い。

(2)12月18日発表の1ヶ月予報では,気温,降水量,日照時間ともに平年並と見込まれている。

3)防除上注意すべき事項

(1)多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。

コナガ

1)予報内容

発生量 平年並(前年並)で,発生程度は「少」

2)予報の根拠

(1)12月中旬のキャベツ,ブロッコリー,カリフラワーの巡回調査では,発生圃場率が16.7%,10株当たりの幼虫及び蛹数が0.1頭であり,ほぼ平年(8.1%,0.1頭)並の発生である。

(2)12月18日発表の1ヶ月予報では,気温,降水量,日照時間ともに平年並と見込まれている。

3)防除上注意すべき事項

(1)多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。葉裏に生息しているので,薬剤散布は葉の裏側を重点的に行なう。

(2)薬剤抵抗性獲得の恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

冬レタス

灰色かび病

1)予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2)予報の根拠

(1)12月中旬の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が3.1%、発病株率が0.1%)。

(2)12月18日発表の1ヶ月予報では、気温、降水量、日照時間ともに平年並と見込まれている。

3)防除上注意すべき事項

(1)圃場の排水をよくする。また、トンネル内が過湿にならないように換気を図る。

(2)収穫期には株元が繁茂して過湿となるので、発生しやすい。

(3)発病株は伝染源になるので、できるだけ早く除去する。

(4)耐性菌出現の恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

菌核病

1)予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2)予報の根拠

(1)12月中旬の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が16.1%、発病株率が1.0%)。

(2)12月18日発表の1ヶ月予報では、気温、降水量、日照時間ともに平年並と見込まれている。

3)防除上注意すべき事項

(1)トンネル内が過湿にならないように換気を図る。

(2)発病株を放置しておくとも多数の菌核を形成して伝染源になるので、できるだけ早く処分する。

(3)耐性菌出現の恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

アブラムシ類

1)予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2)予報の根拠

(1)12月中旬の巡回調査では、発生圃場率が20.0%、寄生株率が1.0%であり、ほぼ平年(2.7%、0.2%)並の発生である。

(2)12月18日発表の1ヶ月予報では、気温、降水量、日照時間ともに平年並と見込まれている。

3)防除上注意すべき事項

(1)多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。アブラムシ類は葉裏や芯芽に寄生しているので、薬液が葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。

冬春ホウレンソウ

べと病

1)予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2)予報の根拠

(1)12月中旬の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が18.2%、発病度が1.3%)。

(2)12月18日発表の1ヶ月予報では、気温、降水量、日照時間ともに平年並と見込まれている。

3)防除上注意すべき事項

(1)品種は、本病レース1～7に抵抗性があるものを利用する。

(2)葉が繁茂すると被害が多くなるので、肥培管理に注意する。

(3)春先の病勢の伸展を抑制するため、薬剤は予防的に用いる。

(4)薬剤は下葉や葉裏にもよくかかるよう、ていねいに散布する。

(5)罹病株を圃場に放置すると、次作の第一次伝染源となるので、発病株は速やかに処分する。また、春先に萎縮して奇形となった株はべと病に感染しているため、速やかに処分する。

アブラムシ類

1)予報内容

発生量 平年より多く(前年より多い)、発生程度は「少」

2)予報の根拠

(1)12月中旬の巡回調査では、発生圃場率が90.9%、発生程度指数が22.7であり、平年(22.1%、5.5)と比べて発生が多い。

(2)12月18日発表の1ヶ月予報では、気温、降水量、日照時間ともに平年並と見込まれている。

3)防除上注意すべき事項

(1)多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。アブラムシ類は葉裏や芯芽に寄生しているため、薬液が葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。

冬春イチゴ

うどんこ病

1)予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2)予報の根拠

(1)12月中旬の巡回調査では、発生圃場率が7.1%、発病葉率が0.1%、発病果率が1.1%であり、平年(8.2%、0.3%、1.1%)並の発生である。

(2)12月18日発表の1ヶ月予報では、気温、降水量、日照時間ともに平年並と見込まれている。

3)防除上注意すべき事項

(1)発生が多くなってからでは防除が困難になるので初期防除に努める。

(2)古葉を早めに除去し、葉裏に薬液が十分かかるように丁寧に散布する。

(3)罹病した果実や茎葉などは早期に見つけ、除去した後圃場外に持ち出し、病原菌密度の低下に努める。

(4)耐性菌出現の恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

灰色かび病

1)予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2)予報の根拠

(1)12月中旬の巡回調査では、発生圃場率が7.1%、寄生株率が0.4%であり、ほぼ平年(0.9%、0.01%)並の発生である。

(2)12月18日発表の1ヶ月予報では、気温、降水量、日照時間ともに平年並と見込まれている。

3)防除上注意すべき事項

(1)気温が20℃くらいの低温で多湿の時に発生しやすいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。

(2)発病果は伝染源になるので、速やかに圃場から持ち出し処分する。

(3)耐性菌出現の恐れがあるので同一系統の薬剤の連用は避ける。

アブラムシ類

1) 予報内容

発生量 平年並～やや多く(前年よりやや多い),発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1)12月中旬の巡回調査では,発生圃場率が42.9%,寄生株率が 5.1%であり,平年(17.1%, 2.3%)と比べてやや多めの発生である。

3) 防除上注意すべき事項

(1)多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。アブラムシ類は葉裏や芯芽に寄生しているので,薬液が葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。

ハダニ類

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で,発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1)12月中旬の巡回調査では,発生圃場率が42.9%,寄生葉率が 2.2%であり,ほぼ平年(24.7%, 3.6%)並の発生である。

3) 防除上注意すべき事項

(1)多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。ハダニ類は葉裏に寄生しているので,薬液が葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。

(2)薬剤抵抗性獲得の恐れがあるので,同一系統の薬剤の連用は避ける。

.その他

- 1.朝夕の冷え込みが厳しくなってきましたので,施設やトンネルの換気をする場合は,内部温度が急激に下がらないよう適切に行ない,夕方は早めに閉め込んで下さい。
- 2.薬剤の使用に当たっては,必ず農薬ラベルに記載されている事項を遵守してください。

発生量の表示

発生程度: 甚>多>中>少>無

発生量: 多い>やや多い>並>やや少ない>少ない

徳島県立農林水産総合技術支援センター病害虫防除所

テレホンサービス : 0 8 8 3 (2 6) 1 1 9 9

U R L : <http://www.green.pref.tokushima.jp/boujyosyo/>

病害虫の発生予察情報,発生状況,防除法等をお知らせしています。